

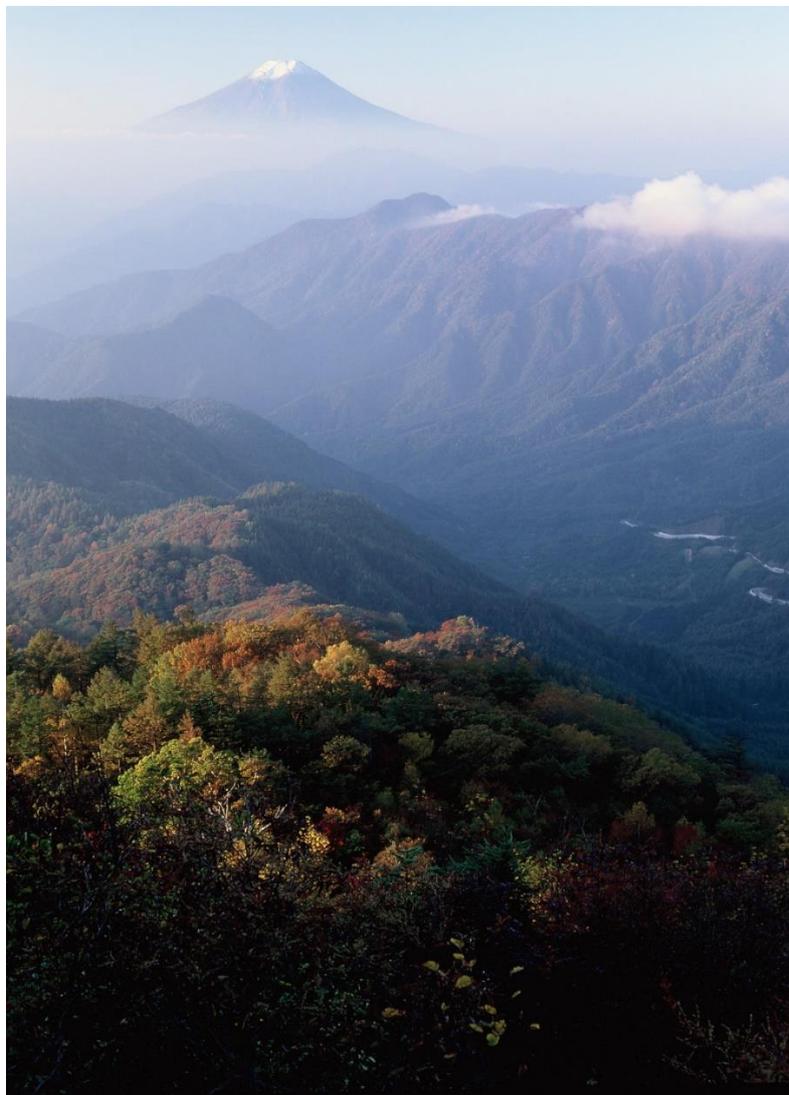
第3回

秀麗富嶽十二景写真コンテスト

入選作品

最優秀賞

秋光 奈木 正次（静岡県沼津市） 雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

雁ヶ腹摺山から見る富士山、それは重量たる山並の涯に美しく立ち上がる。その特色を十二分に生かしたレンズ選択が光る。前景となる紅葉の尾根ががちりと画面を引きしめ、そこからしだいに薄れ行く山々の重なりを統一する富士の山容。

構図的に間然するところがなく、しかもこのコンテストの意義も十分に表現されている。右上方の雲が重くなりがち画面のバランスを支え、より富士山の高さを強調する。類型的になりがち雁ヶ腹摺山からの富士山に新たな展開を与えたと言ってよい秀作であり、多くを語る必要もない。

推薦

早春

小林 博（山梨県大月市）

本社ヶ丸



白簾史朗氏講評

なみなみならぬ技倆を持った作者である。条件的には決して有利とはいえないモチーフを見事に生かした作画を高く評価したい。もともと本社ヶ丸や清八山一帯は三ツ峠山が前に来るのであまり好適なアングルを得られないが、そうした条件中から全く新しい表現がなされたことに敬服する。

右手の樹林に配する左上方の富士山、これは典型的な逆「い」の字構図であり、もっとも安定したオーソドックスな切り取りである。そのため光も弱く、色彩的にも地味なこの写真がどっしりとした力を持つことになった。

ただ惜しいのは左方及び上方をもう少し切り詰めたかった。さらに力強く、富士山の高さが協調されたはずである。

推薦

秋映

佐野 文隆（静岡県富士宮市）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

素晴らしい好条件下の富士山、こうした写真を見ると、何と日本とは美しい国かと思う、さらに山梨は、大月はと想いは波及する。そうした意味からこの作品は、このコンテストの趣旨に十二分に副っているといつてよい。そして、これだけの好条件をキャッチするために払った努力も察せられるのである。

右方からの紅葉と青空、この暖色と冷色による反対色構成が画面に華麗さを与え、さらに富士山頂の新雪がそれに花をそえている。紅葉が赤一色でなく、緑や黄が残っていることもすがすがしい印象を与えるが、それにはやはり画面構成の秀抜さがあずかっている。あと少し下部を切ることによって、さらにその感じは強調されよう。

特選

たそがれ 鈴木 幸次（東京都葛飾区） 雁ヶ腹摺山



白簀史朗氏講評

最優秀賞とともに構図上、最もすぐれた作品といえる。ただ、他の作品と比較すると色彩的に単調であるため損をしている。実際には落日間近い光線に色づいた夕もやの中に絶妙なトーンがあり、写真的には高く評価されるものである。

画面左上方に山頂を置き、右下に山裾を流しているが、この場合画面右方の山並の重なりとで逆「い」の字構図を作っている。色彩的単調さを補い、画面の安定のため、下方に大きく暗部を置いたこともよい。よく見ればこのように細かい配慮がなされていることがわかる。地味ながら味わい深い作品。

特選

波打つ原 高村 茂（山梨県富士吉田市） 白谷ノ丸



白簾史朗氏講評

今回ただひとり二点入賞の作者である。白谷ノ丸は黒岳山の南方山腹にカヤトの斜面で、本来十二景には入っていない。しかし大蔵高丸や牛奥ノ雁ヶ腹摺山の近辺であるところから、今回特別に採用した。

広角レンズを使い、思い切って手前の草原から富士山までを入れ込んでいる手法はなかなか大胆で、草の葉のそよぎがうまく生かされている。この場合はカメラアングルをもっと左下方に振ることで、より効果があがったと思われる。作品そのものとしては上空を半分以上、右方を4分ノ1カットすることが必要で、そうすることによって草の葉のそよぎがすべて富士山にむかってなびく構図となる。惜しいことであった。

特選

秋の大蔵高丸より

小林 和義（山梨県東山梨郡）

大蔵高丸



白簾史朗氏講評

今回の上位入賞は七点中、秋が四点と過半数を占めたが、これは天候が影響し澄んだ大気中にすっきりと立つ富士山が得やすいがためだろう。この作品もその秋に影響されたものであるが、澄んで大気中にそびえる山姿ではなく、秋の風物詩であるススキを配したものとなっている。

一見して実に美しい画調であり、別の意味で、秋の清澄さをよく表現しているが残念なのは富士山が画面中央にきてしまったことで、ここでは上空を3分ノ2、左方を4分ノ1弱切る必要がある。そのことによって、美しい画調はさらに生かされ、さらに上位入賞の可能性も生じてくる。題名に一考。

入賞

早秋の雁ヶ腹摺山

加藤 泰郎（山梨県大月市）

雁ヶ腹摺山



白簀史朗氏講評

画面濃度が高すぎ、全体に重くなっている。もう少し濃度を下げると良くなる。

入賞

初冠雪

竹田 辰巳（山梨県大月市）

牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

富士山が画面中央に位置するため、画面に動きがない。この場合、山頂を右に寄せることにより、構図がととのう。

入賞

秋色

高村 茂（山梨県富士吉田市）

大蔵高丸



白籟史朗氏講評

空部の空きすぎ。約半分近く切り、右方を6分ノ1つめることによって、素晴らしい画面となった。

入賞

春の富士と三ツ峠山 松里 房子（東京都板橋区） 滝子山



白簾史朗氏講評

題名が不適。光線が平板だったため、富士山に深みがない。また、空部が空きすぎ。

入賞

冬の華

遠藤 潤（山梨県東八代郡）

笹子雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

これも富士山が画面中央部にある。空部はこのままで、左方を稜線の凹部で切ると富士と霧氷のバランスがとれる。

入賞

晩春の富士 秋山 重歳（山梨県大月市） 扇山



白簾史朗氏講評

空部の空きはよいが、山頂が画面中央部にきている。一見安定しているようでありながら、動きのないという欠点の方が大きい。左方を切るとよい。

入賞

晩秋の朝焼け

北沢 清行（山梨県大月市）

百蔵山



白簾史朗氏講評

構図的にはほぼ及第、やや空部が多いのみである。色彩再現も良好だが若干単調。

入賞

富士を望む桜 井上 和夫（山梨県大月市） 岩殿山



白簾史朗氏講評

これも構図的には文句ない。やや左方をを切ると尚よい。作者の技術が光る。

入賞

雪化粧 加藤 公男（山梨県大月市） 岩殿山



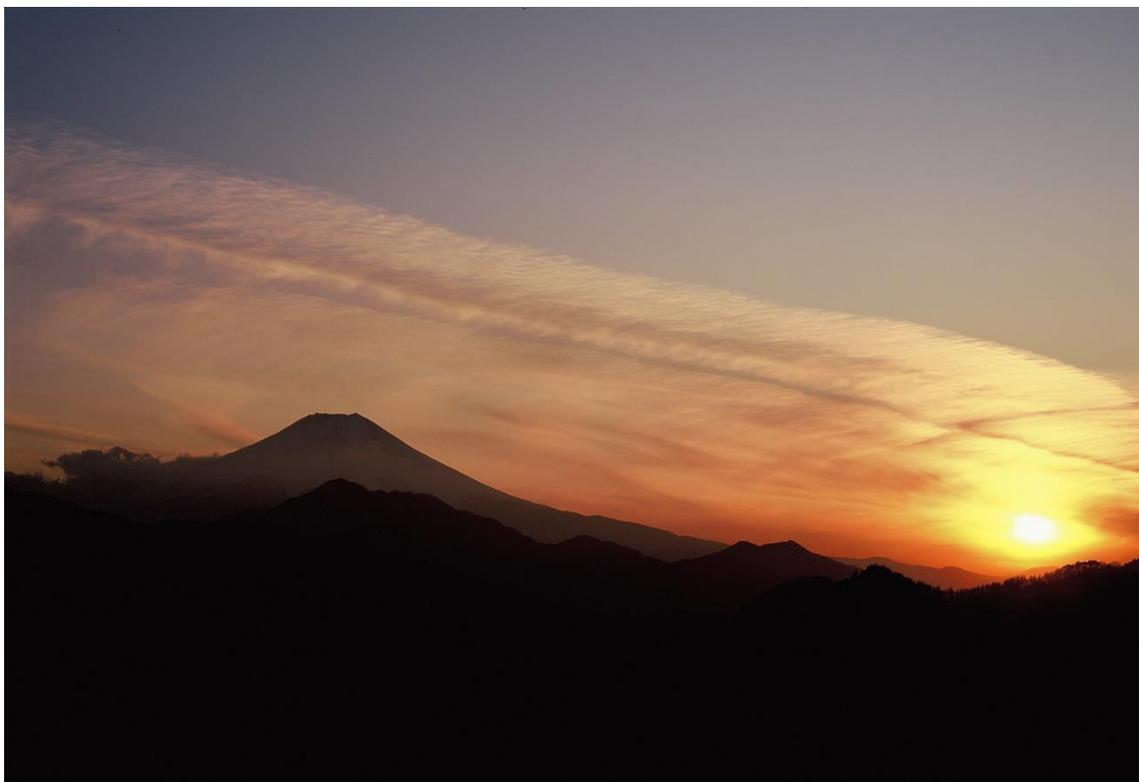
白簾史朗氏講評

好条件をキャッチし、それを生かす。手前の入れ込みがよく、ムード満点。
ただし富士山が中央すぎた。

入賞

夕やけ (予震)

坂本 典子 (山梨県大月市) 高畑山



白簾史朗氏講評

色彩再現拔群。下部がやや多すぎることと、どこかで以前見た感じがあり損をしている。

入賞
静寂

丸山 敏章（山梨県山梨市） 高川山



白簾史朗氏講評

未明時、桂谷の断層谷に停滞する朝もやが素晴らしいムードを持つ。露出値適正であるが、やはり富士山が中心すぎる。

入賞

ツツジ咲く

流石 匠（山梨県南都留郡）

清八山



白簾史朗氏講評

やや富士山が左方に片寄りすぎ、おおらかさで損をしている。色再現は良好、左へカメラを振るとよかった。

総評

審査員長 白簾史朗

第3回目を迎えた大月市「秀麗富嶽十二景写真コンテスト」は、昨年第2回における不振を一挙にくつがえす好調ぶりを見せ、関係者を喜ばせた。応募者数59名、応募作品総数168点はともに第2回の二倍以上であり、ようやくにしてこのコンテストが一般に知られてきたことの実証であろう。ことに内容に関しては過去二回に比して大幅な向上充実が見られ、このコンテストのため努力を続けている市当局と担当者の労がようやくに報いられたものといえる。

しかし、応募作品を一堂にならべてみると、特定の山頂からという片寄りが見られるのは残念であった。アプローチの便利な山に人気が集中するのはいたし方ないともいえるが、「秀麗富嶽十二景」と銘打ってのコンテストである以上、やはり、全ての山頂からの展望が欲しい。第2回目までは牛奥と笹子の両雁ヶ腹摺山、それに滝子山と高畑山がなかった。今回はそれが大きくカバーされたとはいえ、今度はアプローチの便利な九鬼山がなかったのは残念である。

全体に見ての内容の向上充実は著しいものがあり、今後に大きな期待が寄せられる。着眼点、条件の生かし方はまず及第点といえ、さまざまなアングルの表現が見られた。だが、一面、構図の不備が目立ち、水平の均衡を欠いたものなどもあり、それらは涙を吞んで落とさざるを得なかった。

平成7年10月、雁ヶ腹摺山において行われた撮影会の影響もあって、この山からの富士山の応募は多数を数えたが、残念ながら当日の作品はいま一步のところに入賞を逸し、他の作品が栄冠に輝いた。最優秀作品から推薦、特選、入賞の総数が限定されているため、あと一步のところに入賞をのがした作品も多く、関係者としてもまことに惜しいことに思える。こうしたすべてのことがらを踏まえ、コンテストそのものも徐々に改善して行きたいと考えている。

また、従来十二景中、笹子雁ヶ腹摺山は展望の条件が他に比して不利のため、4回目以降はそれに代わって大月市の東北方、松姫峠の東方に位置する奈良倉山（1349M）を十二景中に加えることとなった。各位には了承の上、この山に改めて取り組んでいただきたい。

今回の入賞を逸した方々も、第4回目のスタートはすでに切られていることに思いをいたし、また、一年頑張つて、今度こそ全山頂からの富士山をそろえていただきたいと念じている。また、今回も地元の利を生かした大月市及び山梨県居住者が入賞の大部分を占めたが、今後はこれが全国にひろがって行くことは確実である。そうした互いの切磋琢磨がまた、このコンテストをより高きに押し上げることになる。各位のさらなる精進を期待したい。